

日頃から受容能力に自ら心懸けることも、緩和ケア

ほんの少しだが緩和ケアの NPO に係わっているだけに、がん問題から感じたこと等は、時々等 HP でも発信している（「雑学 BN」の「緩和ケア関係」：参照）。

自分の中では、死に向き合う人への緩和ケアはがんに限らないのではないか（「雑学 BN」の「緩和ケア関係」、2007.03.28.「『緩和ケア』は、がん関係の専有語彙なの？」：参照）と思っている。

では、がんの問題の特徴とは何かを自分なりに考えると、一つには、がんの宣告により「日常生活の急激な変化」への受容能力（自分に不都合なことが起きた時に、その不都合さの中でも人間として生きているという証を見ることが出来る能力）の問題。

もう一つとして、身体的痛みの問題でないかと思っている。

さて、昨年、「がん対策基本法」が成立したが、この陰には全国的な「がん患者大集会」の動きがあった。

この「がん患者大集会」に寄せられた当事者、家族、支援者等の手記集が出版されたことを知り、「がん患者大集会～『全国』患者・家族のメッセージ～」を購読した。

この書は多くの方がほぼ一人が 2 P の手記集だけに、がんに向き合う、つき合う、また、どう支えるか（声かけするか、等）のエッセンスが記載されているように思えた。

また、全国的「がん患者大集会」の第一、二回の訴えは「がん患者のために、もっと役立つ情報が欲しい」であったが、昨年の第三回は「痛いのはいやだ。がんの痛みを、何とか制御してとって欲しい」というものであったとか。

やはり自分の予想した通り、がんには痛みの緩和ケアの問題が大きいよう。

ではもう一方の「日常生活の急激に変化」への受容能力の問題については、日本の死因の第 1 位はがんであり、3 人に一人がガンで死ぬと云われ、高い確率だけに、がんを宣告されて衝撃を受け、戸惑わないように、日頃から受容能力向上に心懸けることも自らによる緩和ケアのような気がする。

例えば、難病の子どもや人のドキュメンタリー番組等を目にした折、同情はしても「自分には関係のない話だ」と思うのではなく、その子どもや人の生きよう（様）からの「あなたは、どう生きようとしているのですか？」とのメッセージを読み取ることが大事な気がする。